

京 都 大 学

國文學論叢

第 13 号



『四鳴蟬』の作詞法について

——『玉簪記』との関係——

川上 陽介 (二)

兼載「三句め」の技法

長谷川 千尋 (二七)

藤原良経「二夜百首」考

——速詠百首歌から見る慈円との交流——

小山 順子 (三七)



【訂正箇所】17頁 下段
7行目「として」の「三」を「一」に訂正し、15行目「の用例がある。」を「ま
でを削除

【誤】
として「三」。確かに、宗祇流の注釈書には「三句め」の指摘を見ることはできないが、創作の場では、三句の移りについて様々な配慮がなされていたはずである。例えば、永正三年（一五一三）の『牡丹花月村兩吟百韻』の注や、大永二年（一五二二）の『伊勢千句』の諸注は、注者、加子の時期とも不明ながら、肖柏、宗長、宗硯ら、宗祇直弟子の「三句め」の工夫を解き明かしてくれている。一方で、宗祇と同時代の兼載には、その著書や聞書に「三句め」の用例がある。として「三」。確かに、残された

【正】
として「三」。確かに、残された

平成十七年三月二十五日 印刷
平成十七年三月三十一日 発行

京都大学國文學論叢 第十三号

編集発行者

京都大学文学部国語学国文学研究室「國文學論叢」編集部
〒六〇六―八五〇一 京都市左京区吉田本町
電話 〇七五―七五三―二八二四

印刷者

京都市南区吉祥院池ノ内町10 明文舎印刷株式会社

表紙題字『易林本節用集』より

(京都大学文学部蔵慶長板)